

概念主体の認知プロセスと there 構文

濱 田 英 人
景 山 弘 幸

0. はじめに

人間がある物や出来事を知覚し言語化する場合それをどのように捉えているかで言語表現が異なるものであることは周知のことである。例えば、ある出来事を能動文で表現するのか受動文で表現するのかはすぐれて話者の解釈 (construal) に依存していると言うことができる。そしてこのことは当然次の対立についても当てはまる。

- (1) a. There are some maps on the table.
b. Some maps are on the table.
c. The table has some maps on it. (中右 1998 : 55)

(1a-c) は記述対象である事態は同一であるが、それを概念主体がどのように捉えているかという認知プロセスの違いを反映している。

これまで、上記の there 構文(1a)、はだか存在文(1b)、そして have 構文(1c) に関しては個別的に、また、互いの関係について多くの研究があり、Bolinger (1977)、Lakoff (1987)、中右 (1998)、久野・高見 (2002)、上山 (2003)、對馬 (2004)、谷口 (2005)、葛西 (2007、2008) など非常に興味深い議論がなされている。本稿はこれらの先行研究の成果を踏まえ、Langacker の提唱する認知文法の視点から there 構文について考察し、それが概念主体のどのような認知プロセスを反映しているのかを明らかにしようとするものである。そこで

まず初めに議論の出発点として、there 構文の構文的意味を明らかにするうえで解決しなければならない問題点を整理しておく。

一つ目は there 構文に見られる統語上の主語と意味上の主語の乖離の問題である。次の(2a-c)の統語現象はいずれも there が主語としての名詞として機能していることを示しており、(3b)でも疑問文の語順から there は確かに主語として振舞っている。しかし、その一方で「主語と動詞の一致」では be 動詞と数で一致するのはその後ろの名詞であり、その意味で be 動詞の意味上の主語は後続する名詞とされる。

- (2) a. There was a map on the desk, wasn't there?
 b. There being no train, we had to take a taxi.
 c. The police believed there to be no evidence there.
- (3) a. There is a book on the table.
 b. Is there a book on the desk?

ではなぜ there 構文ではこのような統語的主語と意味上の主語の乖離が生じているのか、これが一つ目の課題である。

二つ目の問題点は there 構文と共起する動詞の特徴である。一般に there 構文に用いられる動詞は be 動詞を中心とする「存在」や「出現」を表す動詞で、(4a-b)のような「行為」を表す動詞は容認されない。

- (4) a. *There sang a tall middle-aged woman on the stage.
 b. *There laughed several students during the lecture.

(上山 2003 : 16)

しかし、行為を表す動詞の場合すべて容認不可能となるのかと言えれば必ずしもそうではないことは次の例からも明らかである。

- (5) a. There seized him a fear that perhaps after all it was all true.
b. In the hall there was piled a large assortment of packages and parcels and small articles of furniture.

(Douglas Biber et al. 1999: 946, 947)

この(4)と(5)の容認可能性の違いは概念主体の事態認識のどのような違いを反映しているのだろうか、これが二つ目の課題となる。

三つ目は there 構文の意味上の主語とされる名詞句に関わる制約の問題である。there 構文の意味上の主語は不定名詞句のみ容認可能で(6a-c)のような定名詞句や代名詞、固有名詞は許容されない。

- (6) a. *There was the map on the table.
b. *There was it on the table.
c. *There was Dr. Park at the conference.

このような場合はむしろ(7)のように定名詞句を主語にした「はだか存在文」で表現するのが自然である。

- (7) a. The map was on the table.
b. It was on the table.
c. Dr. Park was at the conference.

この「定性制約 (definiteness restriction)」に関しては機能主義的な視点から「there 構文は聞き手にとって新しい情報 (hearer-new information) を提示する表現 (上山 2003: 22)」であり、また、文構造は「旧情報から新情報へ」という語順になっていることが自然であるとするので(6)と(7)の容認可能性の違いを説明することも可能である。では、この there 構文と「はだか存在文」を概念主体が記述対象の事態へアクセスする認知プロセスの違いとして捉え直す

とそれぞれをどのように特徴付けることができるのか、これが三つ目の課題である。

本稿では上記のような *there* 構文の特殊性を概念主体の事態に対する認知プロセスという視点から考察し、*there* 構文の認知的な特徴付けを明らかにする。第1節では先行研究として久野・高見 (2002)、谷口 (2005)、Langacker (1991) を概観し、残された課題について整理する。第2節では認知文法の基本的な概念の中から本議論に必要なものについて概観する。第3節では概念主体の事態への認知プロセスと *there* 構文の関係について明らかにする。3.1節では概念主体の認知プロセスを中心に述べ、3.2節では *there* 構文で記述される事態の概念化空間について述べる。第4節はまとめである。

1. 先行研究

この節では *there* 構文の先行研究として久野・高見 (2002) と谷口 (2005)、そして Langacker (1991) を概観し、この構文のもつ特徴を整理しておく。

1.1. 久野・高見 (2002) の分析

久野・高見 (2002) は *there* 構文の機能的制約を以下のように提案し、その妥当性を論じている。

- (8) *there* 構文に課される機能的制約：*there* 構文は、意味上の主語の左側の要素が存在や出現を表すと解釈される場合にのみ、適格となる。

(久野・高見 2002: 54)

そこでまず言語事実について確認しておく、次の(9)のように動詞が「存在」や「出現」ではなく「行為」を表している場合には *there* 構文は不適格である。また(10)のように行為を表わす動詞 *walk* であっても(10a)と(10b-c)では容認度に差がある。久野・高見は(10b-c)では主語が導入される以前に場所の副詞句

がつくことでその主語の指示対象がその場所へ出現することを表すと解釈され、これが(10a)と(10b-c)の容認度違いであると論じている。

- (9) a. *There danced a young girl in the ballroom.
b. *There sang a tall middle-aged woman on the stage.
c. *There laughed several students during the lecture.
d. *There played three children in the playground. (ibid: 55)
- (10) a. *There walked two prison guards into the courtroom.
b. There walked into the courtroom two people I had thought were dead.
c. Into the courtroom there walked two people that I had thought were dead. (ibid: 51)

また、(9a-d)に関しては *dance*、*sing*、*laugh*、*play* は「行為」を表す動詞であり、「存在」や「出現」を表すものではない。「場所句 (*in the ballroom*、*on the stage*、*in the playground*)」が文末にあり文全体としては存在が示されているが、このような場所句が意味上の主語が導入される時点では聞き手にまだ提示されていないため(8)に違反し不適格と判断されると述べている。

また、同様の説明が受動文の *there* 構文にもあてはまるとし、次の(11)と(12)の容認可能性の違いについて(11a)の *are placed* は「存在」を表し、(11b-d)の *was born*、*was heard*、*was brought in* は「出現」を表しているため(8)の制約に抵触せず適格と判断されるが、(12a-c)は意味上の主語に起こった出来事を表すのみで存在や出現を表していないため不適格となると主張している。

- (11) a. There are placed many silver spoons on the table. (存在)
b. There was born a baby to the Joneses. (出現)
c. There was heard a rumbling noise. (出現)

- d. In the evening, there was brought in, by the porters, some half dozen cases of whisky. (出現)

- (12) a. *There was hit a man on the head.
b. *There were blamed three people at the meeting.
c. *There were arrested three rioters in the park. (ibid: 55)

更に、久野・高見は「場所の副詞句」ばかりでなく、単に主語の行為を表すために不適格な文が文頭の「時の副詞句」により存在/出現の解釈が可能となり得るとして以下の例を挙げている。

- (13) a. *There were arrested three rioters in the park.
b. Before the illegal, unconstitutional “elections” of 11 October 1992, there were arrested about 2 thousand citizens, among them well known Russian Moscow dissident Valeria Nowodvorskaya.
c. In the year 1909 there were arrested and brought into court fifteen thousand young people under the age of twenty, who had failed to keep even the common law of the land.
(ibid: 62-63)

ではなぜ「場所の副詞句」「時の副詞句」の位置の違いによって文が「存在」や「出現」と解釈されたり、「出来事」と解釈されるのだろうか。この問題は概念主体の認知プロセスの違いとして問い直すことができるように思われる。

1.2. 谷口 (2005) の分析

谷口 (2005) は「構文の意味」となる事態概念と「動詞の意味」となる事態概念が合致する場合にのみ表現が容認されるとする構文文法の視点から there

構文を分析し、この構文がある存在物をドメインへ導入し位置づける機能を果たしていると解釈される場合のみ容認可能となると主張している。つまり、図 1 に示されるように there により抽象的・スキーマ的な物理的 (あるいは心的) ドメインが提示され、そのドメインにある実体を導入する機能を there 構文が果たしているということである。

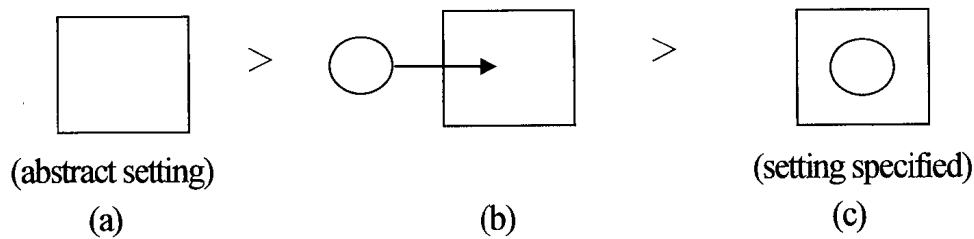


Figure 1

(谷口 2005 : 141)

そして、図 1 に示される構文の意味機能に合致する動詞として以下のものを挙げている。

- (14) a. ある存在物があるドメイン内に存在することを表す動詞
 b. 空間における静態的な位置を表す動詞
 c. ある存在物があるドメインに出現することを表す動詞
 d. ある存在物があるドメインに移動してくることを表す動詞

- (15) a. There is a picture on the wall.
 b. There stood an old clock on the wall.
 c. There appeared a man with a black mask.
 d. There arrived a lot of travelers in the station.

(c、d は谷口 2005 : 139)

谷口は図 1 (c) のような「終点」を特定している動詞のみが適格となると主張し、以下の(16a)が容認されないのは「消える」という移動が起点は特定されて

いるものの終点が特定されていないからであり、それに対して(16b)が容認可能となるのは前置詞句を文頭に明示することで終点が特定化されるためであると述べている。

(16) a.* There disappeared ship after ship.

b. In this vortex there disappeared ship after ship.

(Bolinger 1977: 100)

久野・高見および谷口の分析は *there* 構文になじむ動詞はプロトタイプ的には「存在」「出現」「移動」の動詞であるが、それ以外の動詞 (e.g. 動作動詞) であっても「終点」を表わす *setting* 要素が概念主体によって認識されていれば *there* 構文と共起することことを明確にしたという点で大きな意義をもつ。ではなぜ事態の「終点」認識が重要となるのか。このことについては「事態把握 (*scanning*)」の問題として3節で述べるが、その前に本稿の議論の基礎となる Langacker の *there* 構文の分析を概観しておく。

1.3. Langacker (1991) の分析

Langacker (1991) は *there* 構文の認知構造について *THERE* は *abstract setting* を表し、その中にある関係概念が位置付けられると述べている¹。そしてその関係概念が *BE* によってプロファイルされる関係概念によって精緻化 (*elaborate*) され、*THERE-BE* という合成構造をなすと考えており、以下のモデルを提案している。

¹ 葛西 (2007) では「存在文において存在するのは「もの」ではなく「こと (事柄、事態)」であることが明確に述べられている。Bolinger (1977) では眼前の生の事態記述は *there* 構文になじまず、*there* を必要とするのは事態の生々しさが薄れる時としている (*The less vividly on stage an action is, the more necessary there becomes. ibid.: 96*)。葛西 (2008) は論の末尾で「俳句はまさしく *there* 構文の世界である」とし、「ある「こと」がら」から場面の「一こま」を切り取って、そのまま提示したものである」と述べている。

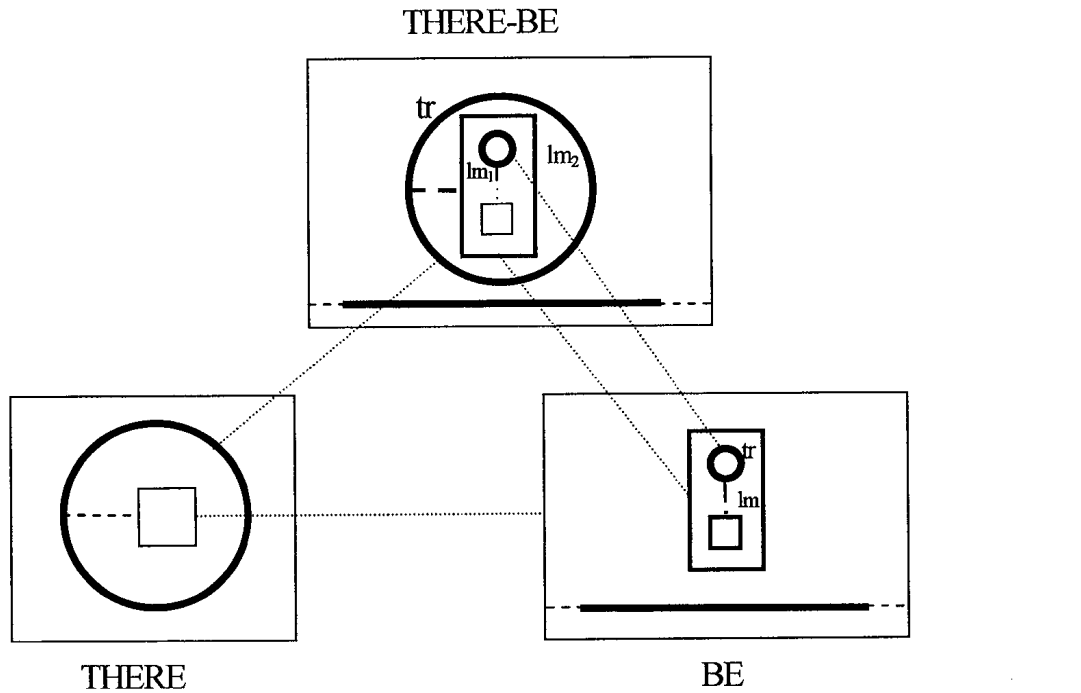


Figure 2

(Langacker 1991: 353)

このことを(17)を例に具体的に示すと、

(17) There is a vase on the table.

there 構文では there が trajector (以下、tr) として認識されており、BE によってプロファイルされる関係概念中の tr (図2の右下図中の tr) は合成構造の段階 (上の図) では landmark (以下、lm)₁ として認識されている。そしてそれが名詞句 (*a vase*) によって精緻化されて *there be a vase* となり、BE によって想起されるスキーマ的な状況が適切な補部 (*on the table*) によって具現化され *there be a vase on the table* となり、最終的にグラウンドされることで *There is a vase on the table* となるという主張である。

1.4. 残された課題

1.1.-1.3.節では久野・高見 (2002)、谷口 (2005)、そして Langacker (1991) の分析を概観した。それぞれの分析は非常に優れたものであり、there 構文の特

徴をよく捉えている。そこで、この先行研究から先に挙げた there 構文のもつ三つの特異性がどのように説明されるのかを考えてみると、一つ目の特徴である「文法的主語と意味上の主語の乖離」の問題については、Langacker の分析で「グラウンド化が最終的な段階でおこる」と指摘されていることから説明することができるが、それに至る認知プロセスについては言及されていない。図2は最終段階で trajector/landmark として捉え直された there 構文を示しているものと解すべきものであり、そこに至る認知プロセスについて明らかにする必要がある。

また、二つ目の問題である there 構文と共起する動詞と構文全体の容認度との関係については久野・高見で詳細に議論され、「there 構文は意味上の主語の左側の要素が存在や出現を表すと解釈される場合にのみ適格となる」という機能的制約はこの言語事実をきれいに説明しており、谷口でも認知的視点から議論がなされている。しかし、「場所の副詞句」や「時の副詞句」という setting 要素が概念主体の認知プロセスとどう関わるのかを明らかにすることと、「事態把握 (scanning)」の問題として事態の「終点」認識を明らかにするという課題が残されている。

更に三つ目の性質として挙げた「定性制約 (definiteness restriction)」については there 構文の認知プロセスと、「はだか存在文」の認知プロセスという観点から見直す余地が残されている。

本稿の目的は概念主体の事態把握に関わる認知プロセスの視点から there 構文の構文的意味とその認知プロセスを明らかにすることであるが、議論をより明快にするために次節では認知文法の基本的な概念の中から本議論に直接関わるにもものついて概観しておく。

2. 認知文法の基本的な概念

認知言語学の言語観は先にも述べたように「言語表現は概念主体の事態の解釈 (construal) を反映する」というものである。Langacker は事態を解釈する

認知操作 (認知プロセス) として以下のものを挙げている。

2.1. トrajektorとランドマーク (trajector and landmark)

人間がある事態を知覚しそれを言語で表現しようとする場合、その事態の中の特定の实体 (entity) に意識を向け、その視点から事態を述べる。このとき意識の向けられている实体は話者にとって際立った存在であり、通常これが主語として言語化される。このように事態の中で一番目立って認識される实体を trajector (tr) と呼ぶ。また、2 番目に目立って認識されている实体を landmark (lm) と呼び、通常はこれが目的語や前置詞の目的語として言語化される。例えば、次の (18a-b) では記述対象は同一であるが、図 3 に示されるように何を tr として認識するかで言語表現が異なっている。

- (18) a. The lamp is above the table.
b. The table is below the lamp.

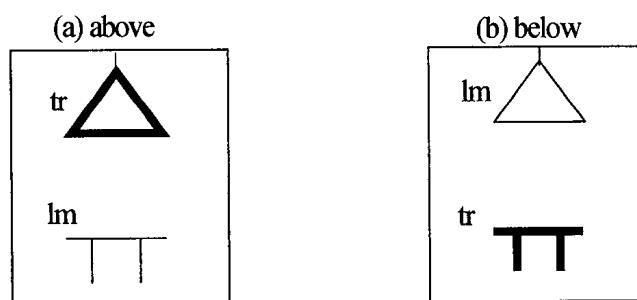


Figure 3

2.2. 順次的走査と累積的走査 (sequential scanning and summary scanning)

Langacker (1987、1991) は我々の事態の把握の仕方として (19) のように定義付けられ、図 4 に示されるような 2 つの認知モードの存在を指摘している。

- (19) Two modes of cognitive processing:
(a) Sequential scanning (順次的走査):

A mode of processing in which a series of component states are activated successively in non-cumulative fashion (i.e. a situation is followed in its evolution through conceived time, as in watching a film).

(b) Summary scanning (累積的走査):

A mode of processing in which a set of specifications or a series of component states are activated successively yet cumulatively; thus, after a building-up phase, all facets of a complex structure are coactivated and simultaneously accessible.

(Langacker 1991: 553, 554)

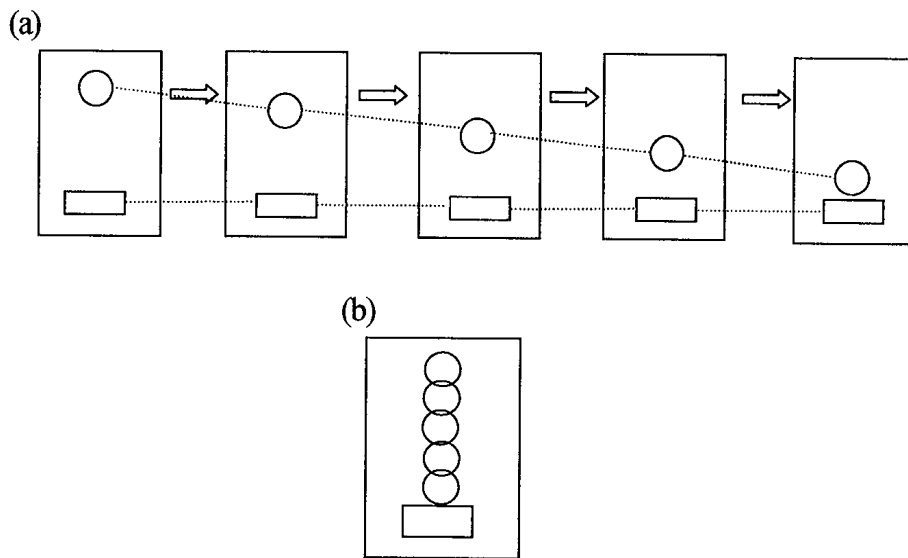


Figure 4

(Langacker 1987: 144)

つまり、順次的走査 (sequential scanning) とは物体の移動という客観的事態を時間の経過に沿って「連続的に前の状態と現在の状態を次々と認識していく」事態把握の仕方であり、累積的走査 (summary scanning) とは連続した構成要素を次々と累積する形で把握し、その結果「全体を1つのまとまった構造体として認識する」事態処理の仕方である。

この二つの認識の仕方の違いはある種の動詞と前置詞の概念的差異を理解す

る上で有用である。例えば、‘enter(動詞)’と‘into(前置詞)’では前者が順次的走査によって成分構造が個々に概念化されてプロセスを形成するのに対して、後者は非時間的關係を表す累積的走査によって成分構造がまとまった1つの構造体として認識されている。

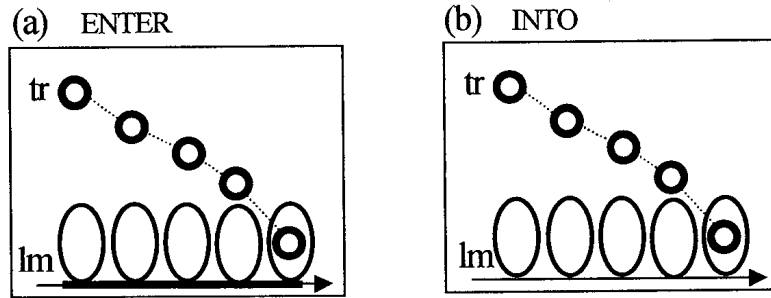


Figure 5

また、この二つの認知モードは動詞とその名詞化の關係にも深く関わっている。次の(20a)では図6(a)のように *the ball* の曲線を描いた移動を時間の流れにそって順次的に捉えているのに対して、(20b)の *a curve* では図6(b)のように同一の移動を非時間的な一まとまりとして認識している。

- (20) a. The ball curved.
 b. He threw a curve. (Langacker 1987: 146)

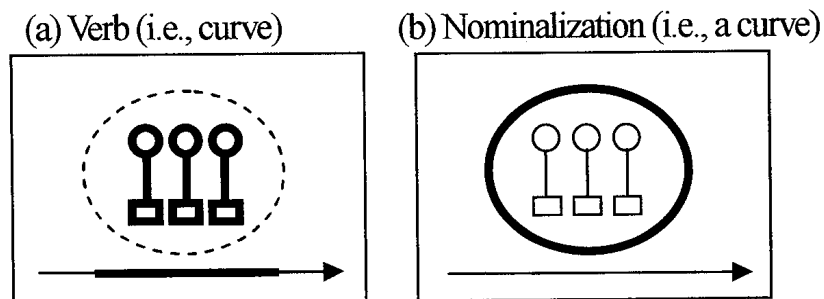


Figure 6

2.3. 参照点能力と参照点構造 (reference point ability and reference point constructions)

Langacker (1993) は人間の基本的な認知能力の一つとして以下のように定義付けられる参照点能力 (reference point ability) を挙げている。

(21) Reference point ability (参照点能力):

the ability to invoke the conception of one entity for purposes of establishing mental contact with another (i.e. target).

(Langacker 1993: 4)

例えば道端で見知らぬ人に『郵便局はどこですか?』と尋ねられ『郵便局はあそこに見える銀行の角を曲って5軒目です。』と何かを目印にして聞き手が求める場所の情報を与えるというようなことは日常よくあることであるが、このような場合の「銀行」が参照点であり、「郵便局」がターゲットにあたる。

この参照点能力によってある実体を認識するという認知プロセスが活性化される要因とこの認知プロセス全体の特徴を挙げると以下のようなになる。

(22) 参照点能力の特徴:

- (a) 参照点 (reference point) として使用される要素はそれ自体として、あるいは場面から聞き手にとってアクセスしやすい実体である。
- (b) 参照点は target を同定する手助けの役割をもつ。従って、参照点から target へのアクセスを容易にする何らかの関係が両者の間に存在する。
- (c) 参照点は salient な実体であるが、target と心的接触が確立してしまえば、意識の中心となるのは target であり、従ってそれが salient として認識され、相対的に参照点は背景化される。
- (d) ある実体がそれ自体として reference point になりやすい要因

としては次に示される目立ち度の原理 (Salience principle) がある。

human > non-human, whole > part, concrete > abstract,
visible > invisible

そして、このような特徴を図示すると以下のようなになる。

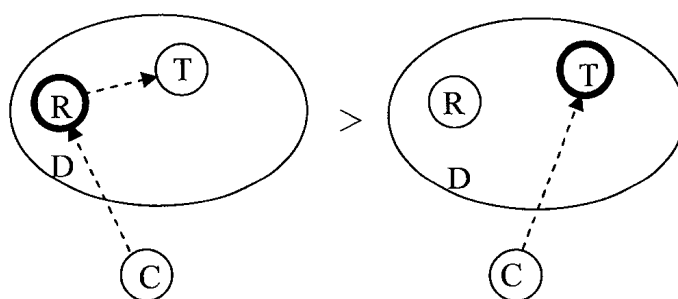


Figure 7

Langacker (1993: 7)

R : reference point (参照点) T : target (目標物) C : conceptualizer (概念主体)
 D : dominion (支配領域) : R によって想起される領域で、可能な target の集合から成る。
 -----▶ : mental path (心的経路)

このような参照点能力の認知プロセスを用いた構造を「参照点構造 (Reference point construction)」と呼び、具体的には以下のような例が挙げられる。

- (23) a. the dog's tail
 b. They envy you your wealth.
 c. John caught her by the hand.
 d. In front of the house stood a beautiful woman.
 e. Have you read Shakespeare?

(23a) は典型的な例であり、the dog が定名詞句であることから話者と聞き手にとって既知事項であり当然目立ち度が高く、それを参照点としてその犬の tail

を同定するという認知プロセスをとっている。また、(23b-c)は全体と部分の関係であり全体の方が目立って認識されやすいことから、*you*、*her* がそれぞれ参照点として機能し、*your wealth*、*the hand* がターゲットとなっている。更に(23d)ではすでに *the house* が話題としてでており、意識の前面にあることから、それを含む *in front of the house* という空間が参照点となり、*a beautiful woman* がターゲットとなっている。(23e)はメトニミー表現であり、ターゲットは言語化されていないが、この場合 *Shakespeare* が参照点として機能し彼によって書かれた作品がターゲットとして理解される。

2.4. ストラクチュラルプレーンとアクチュアルプレーン (structural plane and actual plane)

Langacker (1987、1991、1999) はある実体 (モノやプロセス) がどのように解釈 (construe) されるかという問題を概念空間の違いとして説明している。これは具体的な指示対象を持たない辞書的範疇 (lexical categories) としての実体とその具現形としての実体との区別であり、前者は「モノやプロセスのタイプ」を表しているのに対して後者は話者や聞き手と発話の場面を含めた概念である「グラウンドとの関係で指示が確定するモノやプロセス」を表す。Langacker はこの違いを図 8(a) に示される認知空間の違いとして説明している。図 8(a) では上部の認知空間が type plane を、下部の認知空間が instance plane をそれぞれ表しており、instance plane 上の t_i 、 t_j 、 t_k はそれぞれ潜在的な具現形を表している。また、図 8(b) は辞書的範疇としての 'cat' と発話の場面と結びついた具体的な指示対象としての 'this cat' の関係を示したものであり、後者は無数の潜在的な具現形の中から概念主体が一つを選び出しグラウンドされることで指示物が確定することを表している。

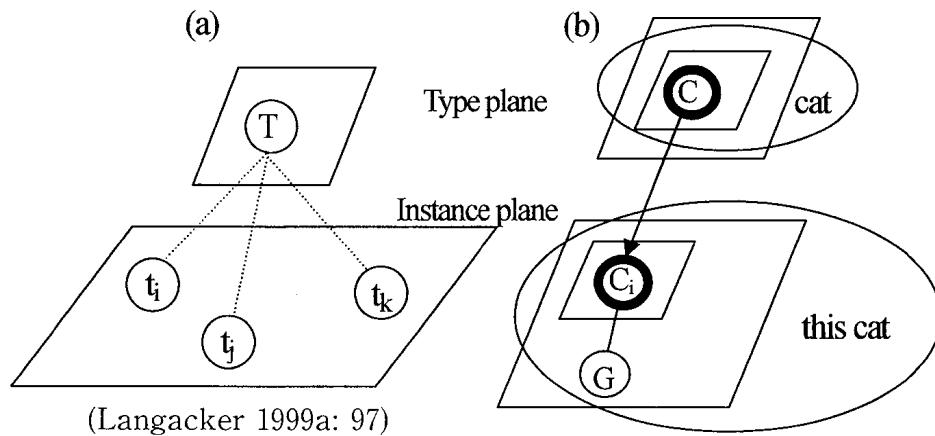


Figure 8

(Langacker 1999b: 97)

このタイプと具現形の区別に加えて Langacker (1999) は具現形をグラウンドされ時間軸上のどこかに位置付けられるものとそうでないものに区別するために instance plane を下位区分し、前者が actual plane 上に概念化されるのに対して後者は structural plane 上に概念化されていると述べている。

具体的には、次の (24a) は現実世界の具体的な事態が述べられており、従って actual plane 上に概念化されていると考えることができるが、(24b) は具体的、個別的な事態を表しているのではなく、むしろ一般的化された事態であり任意の具現形 (arbitrary instance) として理解される。

- (24) a. A messenger just delivered a package.
 b. A messenger always delivers a package on time.

(Langacker 1999: 276)

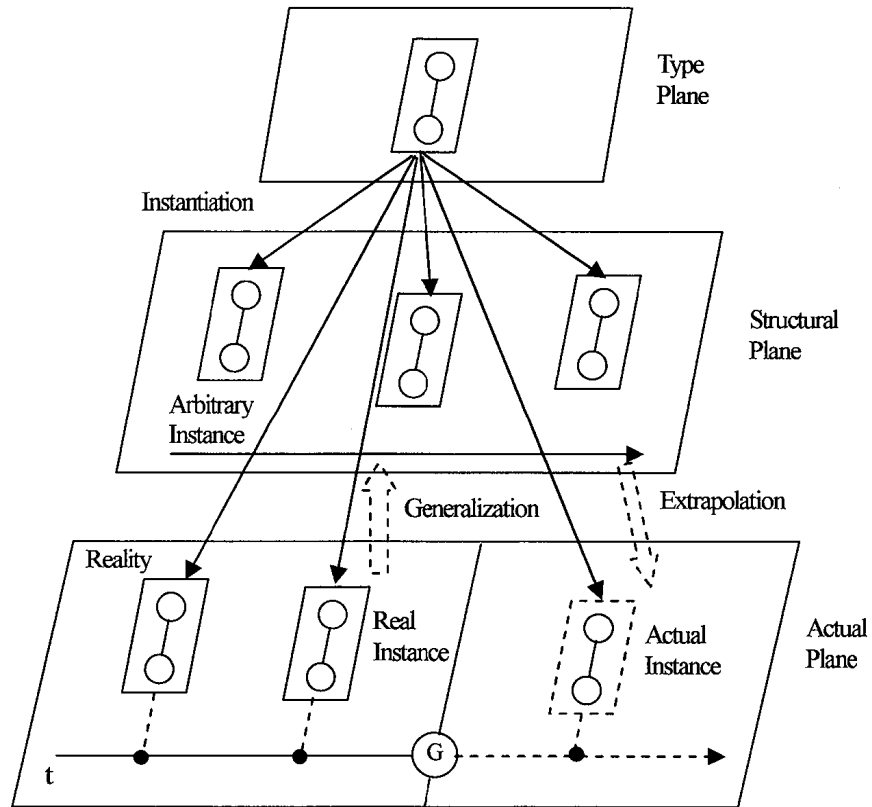


Figure 9

(Langacker 1999: 275)

3. 概念主体の認知プロセスと there 構文

3.1. 概念主体の認知プロセス

前節では認知文法の基本的な概念の中で本稿の there 構文の分析上必要なものについて概観した。この節では概念主体の事態把握の仕方の視点から there 構文を考察し、それがどのような認知プロセスを反映しているのかを述べる。

そこでまず次の言語事実を観察してみよう。

- (25) a. The man is waiting for you.
 b. *There is the man waiting for you.

上の (25a-b) は記述対象は同一であるが、(25a) が容認可能であるのに対して (25b) は容認されない。この (25b) の容認不可能性がいわゆる「定性制約」に抵

触するからであることはすでに述べたが、ではなぜ定名詞句や代名詞、あるいは固有名詞は there 構文に馴染まないのだろうか。結論的にはこのことは概念主体の記述対象である事態へのアクセスの仕方（認知プロセス）という視点から問い直すことができる。一般的に言語表現が「何かについて何かを述べる」ものであるとすると、定名詞句や代名詞、あるいは固有名詞は話者と聞き手にとってそれが発話時の談話空間（current discourse space）内に存在するかあるいは共有知識（shared knowledge）である実体を指示しているという点で既知事項であり、当然、その視点から出来事を述べるのが自然である。つまり、定名詞句や代名詞、固有名詞によって指示される実体（entity）は概念主体にとって目立って認識されており、その結果としてそれが主語として言語化されるのである。そしてこのように記述対象の事態の中から特に際立って認識される実体を取り出し、その視点から事態を記述する認知モードを「tr/lm 認知モード」と呼ぶことにする。そうするとここから導き出される仮説として、(25)のような事態を there 構文で言語化できないということは there 構文は tr/lm の認知モードを反映している構文ではないということである。

では there 構文は概念主体のどのような認知プロセスを反映した構文なのだろうか。この問題の解決の糸口はまさにこの構文のもつ特殊性に求めることができる。そこで、次の文を観察してみよう。

(26) There is a man waiting for you at the door.

先にも述べたように there 構文の特異性の一つは統語的には there が主語として振舞うが、その一方で be 動詞と数で一致するのはその後ろの名詞であるという事実である。そしてこの事実は there 構文が「参照点能力 (reference point ability) という認知プロセスを反映した構文」であるとするだけで自然に説明することができる²。そこでこの「参照点能力を用いた認知プロセスを「RP/T 認

² この点に関して、對馬 (2004) でも同様の分析がなされている。また、there 構文を主体化

知モード」と呼ぶことにする。つまり、まず初めに there という抽象的なドメインを活性化しそれを参照点としてターゲットを同定するという認知構造である。この認知プロセスは2.3.節で概観したように、最初の段階では参照点である there に視点があるが、いったんターゲットである事態との心的接触が確立してしまえばその事態に意識が向けられ目立って認識されるため、参照点の目立ち度は相対的に背景化する。そしてこの認知プロセスを通して、there 構文ではターゲットとして際立って認識されている事態の参与者 (participant) が be 動詞の後ろの名詞であることから be 動詞の数もそれに一致することになるのである³。そこでこの2つの認知モードの違いを図示すると以下のようなになる⁴。

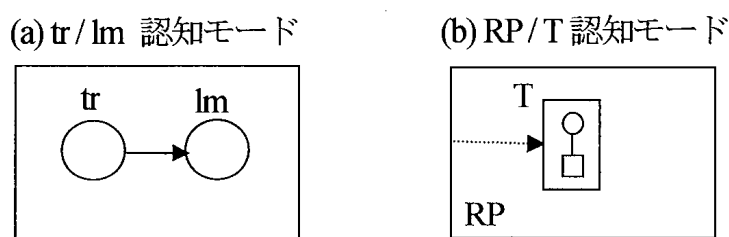


Figure 10

There 構文が図 10(b)の参照点構造 (reference point construction) を反映した構文であるとする、次にターゲットとなる事態がどのように認識されるかが問題となる。結論的には、このことは there 構文が抽象的な空間ドメインを活性化しそこにターゲットを位置付ける認知構造であることから自然に説明することができる。つまり、この認知構造からターゲットである事態は there 領域

(Subjectification) の視点から分析しており、興味深い議論がなされている。

³ 一般に動詞の数の一致がより近い名詞と一致するという以下のような現象を概念主体がどちらをより目立って認識しているかを反映していると考えられることも可能である。

(i) a. Either the manager or her assistants are coming to the meeting.
 b. Neither my sisters nor I am responsible for the matter.
 c. Not only his money but also his books have been stolen.

⁴ この「tr/lm 認知モード」と「RP/T 認知モード」の区別は Koguma (2007) の議論に負うところが大きい。

に「概念的に従属 (conceptually subordinate)」した実体であるということになるからである。従って there 構文のターゲットである事態は、(27)の不定詞節、動名詞節、that 節が主節に概念的に従属しているために 2.2.節で概観した累積的走査という認知モードで捉えられ、「一つの構造体 (a unitary entity)」として「一まとまり (holistic)」に解釈されるのと全く同様に解釈されるのである⁵。

- (27) a. We recognize **that you have to make a profit**.
b. His wife only pretended **to believe his implausible story**.
c. Portia really enjoys **walking along the beach**.
d. Numerous witnesses heard the bomb **explode**.
- (28) a. **That prices will raise sharply** is all but certain.
b. **To acknowledge her failure** was very difficult for Gwendolyn.
c. **Having worked for the newspaper** gives Evelyn a great deal of pride. (Langacker 1991: 439)

また、there 構文が図 10(b)の参照点構造 (reference point construction) を反映した構文であり、ターゲットとなる事態が累積的走査により「一つのまとまった構造体」として認識されていることから更に言えることは there 構文の容認度の違いに「他動性 (transitivity)」という概念が関わっているということである⁶。

そこで、以下の例を観察してみよう。

⁵ conceptual subordination に関する議論は Langacker 1991: 10.2 Complementation を参照。

⁶ 「一つのまとまった構造体」とは中島 (1961) のいう「単純判断」のことであり、葛西 (2008) のいう「場面の一コマ」と同義である。また、tr/lm 認知モードは「二重判断」に対応する。

- (29) a. In all such relations there **exists** a set of mutual obligations in the economic field.
 b. There is something extra and a little heroic about him.
- (30) a. There once **lived** a king who had no ears.
 b. There **stood** an old clock in the hall opposite the front door.

there 構文と共起する動詞が(29)のような「存在を表す動詞」や(30)のように「状態を表す動詞」であることはよく知られているが、こうした存在や状態を表す動詞は「動性 (kinesis)」という観点から他動性が低く、概念主体はそのような事態を一まとまりとする RP/T 認知モードで認識しやすくなるため、その結果 there 構文として言語化されやすいと言える。

しかし、この there 構文には存在や状態を表す動詞以外の動詞も現れ得ることもまたよく知られており、例えば次の(31)では出現を表す動詞が用いられている。

- (31) a. Somewhere deep inside her there **arose** a desperate hope.
 b. There **came** a roar of pure delight.
 c. There **emerged** some new facts while we were working on the project.
 d. There **occurred** a tragic event yesterday.

これは結論的には我々が「出現」という事態をどのように認識するのかに関係がある。つまり、厳密には出現という現象は図 11 のような変化であるが、一般的に我々は変化の過程ではなく、出現の最終局面、つまり「現れたという結果状態」に意識を向けやすい。これは認知操作としては順次的走査よりも累積的走査でその事態を捉えやすいということであり、その結果、一まとまりの構造体として認識されやすく there 構文として言語化することを可能にするのである。

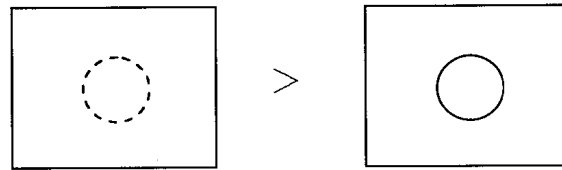


Figure 11

また、この考え方がある程度妥当性を有することは次の対比からも支持される。

- (32) a. *There was hit a man on the road.
b. *There were blamed three people at the meeting.
c. *There were arrested three men in the park.
- (33) a. There are placed many silver spoons on the table.
b. There was born a baby to the Joneses.
c. There was heard a rumbling noise. (久野・高見 2002 : 55)

(32)と(33)の容認度の違いは行為として認識されているのか、それとも行為の結果としての状態として認識されているのかの違いであると言える。つまり、(32a-c)で記述されている事態では行為の過程に意識が向けられるためにそれだけ他動性が高く、順次的走査を伴う tr/lm 認知モードが活性化され、逆に RP/T 認知モードでは認識され難いため there 構文が容認不可能となると判断される。一方、(33a-c)のそれぞれにおいて、(33a)ではスプーンがテーブルに置かれている「状態」、(33b)では赤ん坊が生まれる過程を経て「存在している状態」、また、(33c)では *a rumbling noise* は一定の時間続いた一まとまりの音であり、それを「知覚した状態」として累積的走査により認識されるために他動性が低く、その結果 there 構文が容認可能となると考えられる⁷。

⁷ Bolinger (1977 : 103) は以下のように受動文では by-phrase があると容認され難く、それ

更に、there 構文が tr/lm 認知モードではなく RP/T 認知モードで事態を認識した構文であるとするここでの主張は(34)のようないわゆる「はだか存在文」では主語名詞句は有形で数量的に限定されたものでなければならず、そのため容認不可能と判断されるのに対してそれに対応する there 構文(35)ではそのような制約はないということからも支持が得られる⁸。

- (34) a. *Space is in the room.
 b. *A great deal of merit is in his theory.
 c. *An unpleasant smell is still in my car.
 d. *Sincerity was in her voice.
 e. *Peace was in the region.
 f. *An accident was in the studio.

- (35) a. There is space in the room.
 b. There is a great deal of merit in his theory.
 c. There is still an unpleasant smell in my car.
 d. There was sincerity in her voice.
 e. There was peace in the region.
 f. There was an accident in the studio. (上山 2003 : 24)

が挿入句なった場合には容認可能であると述べている。このことも他動性の低さ、つまり行為よりも結果状態優位が容認度に影響するというここでの主張を支持するものと言える。

- (i) a. ?In the afternoon there were brought in by the porters some half dozen cases of wine.
 b. In the afternoon there were brought in, by the porters, some half dozen cases of wine.
 (ii) a. ?There were shown to us by the diggers several interesting specimens.
 b. There were shown to us, by the diggers, several interesting specimens.

⁸ 中右 (1998) は「はだか存在文」の主語の条件として「有限主語条件」と「有形主語条件」を提案している。

なぜなら、事態を tr/lm モードで認識するという場合の認知操作にはまずその事態の中から一番目立って認識される実体を選び出すという認知プロセスが必然的に関与しているからである。しかし、(34)の文の主語のように無形の実体や抽象的な実体の場合には有形で具体的な実体よりも目立ち度が低く、従って節全体の他動性が低いため、それを tr/lm 認知モードで認識することが難しく、その結果容認され難いと考えられるのである。それに対して there 構文が容認可能であるのはそれが直接ターゲットにアクセスしないという RP/T 認知モードを反映する構文であり、そのままでは導入し難い実体を提示する働きをするためであると言える。

更に付け加えると、there 構文は「存在・出現」を表す構文であり(36)に示されるように「消滅」を表す場合にはこの構文に馴染まないことはよく知られている。

- (36) a. *There vanished a diamond ring from this drawer.
b. *There disappeared three ships last week.

(久野・高見 2002 : 63)

しかし、消滅を表す事態が必ず容認不可能となるのかというと次の言語事実からそうではないことが分かる。

- (37) a. There had vanished from the dresser two rings left by my mother.
b. There had disappeared from the safe two diamond rings that her ex-husband had given her. (ibid)

そしてこの言語事実からも他動性の違いが容認可能性を左右すると考えることができる。つまり、完了形では記述対象の事態それ自体は非時間的な解釈 (atemporal construal) であり、累積的走査 (summary scanning) で事態を認

識しており、それが時間軸上のどこに位置付けられるかは have の時制によって決定される。このことから事態は(36)よりも(37)の方が他動性が低いと認識され、その結果 there 構文で言語化することが可能となるのである。また、「実体の消滅」ということに関して更に付け加えると、(36)のように事態が行為として認識されるときには「存在する状態から消滅への過程」に視点があるが、累積的走査 (summary scanning) により事態が一まとまり (holistic) に解釈される場合には「存在」と「非存在」の対比として理解される。これは例えば次のような表現を考えてみるとうなずける。

(38) There are three pages missing.

(38)の表現は「欠けている3ページがある」というのではなく、「3ページ欠けている」という holistic な事態が存在すると解釈する認知プロセスを反映している。

以上これまで there 構文に馴染む事態は我々の認知能力の一つである参照点能力を反映していることを述べた。そこで概念主体がこの認知プロセスによってどのように事態を認識するのかを考えてみると、それは図12のように示することができる。

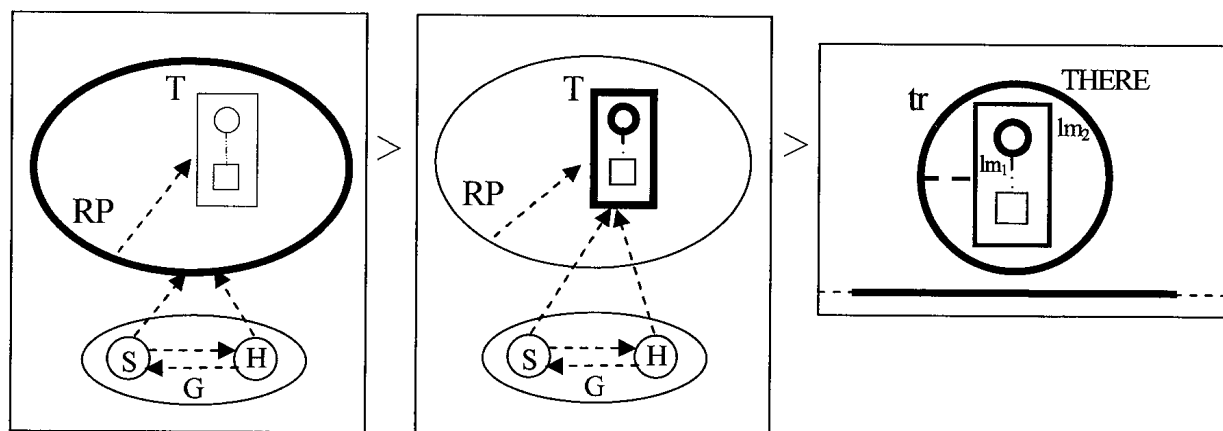


Figure 12

つまり、there 構文が言語化されるまでには事態の動的解釈 (dynamic construal) があるということである。最初の段階では概念主体を含む「今・ここ」という場 (グラウンド (G)) を介して参照点となる抽象的な概念空間が活性化される (左図)。ターゲットである事態が確立された時点で意識の焦点がターゲットに移行し、それが際立った実体として累積的走査により一つの構造体として認識されると同時に参照点の目立ち度は相対的に背景化される (中図)。そして、言語化される最終段階で Langacker が提示している認知構造となるということである。また、この最終段階では認知モードの転換 (捉え直し) が必要であるが、これについては 3.3 節で述べることとする。

3.2. 概念化空間と there 構文

前節では there 構文で指示される事態は人間のもつ認知能力の一つである「参照点能力」によって動機付けられた累積的走査を伴う参照点構造を反映した事態把握であることを論じた。この節では概念主体が there 構文によって指示される事態をどのように認識するのかという問題をその事態が概念化空間上どこに位置付けられるのかという問題として考察し、この構文の特徴を明らかにしたい。

我々は先に (36) が容認されないのに対して (37) が容認可能なのは完了形にすることで事態そのものが累積的走査という認知モードで解釈されるからであることを見た。この分析は次の言語事実にも同様にあてはまる。

- (39) a. ?There danced in the ballroom a young girl with a red headband.
b. ?/??There swam in the river a young girl with a red headband.
- (40) a. There was dancing in the ballroom a young girl with a red headband.
b. There was swimming in the river a young girl with a red headband.

headband.

(久野・高見 2002 : 59-60)

つまり、進行形とは始まりと終わりを認識できるプロセスの内側を直接のスコープ (immediate scope) とし、その記述されている事態を非時間的な関係 (atemporal relation) として捉える認知操作であり、このことからその事態は累積的走査で認識されることになるのである⁹。

そしてこのように事態を累積的走査によって holistic に捉えるということは実は there 構文のもつ「提示機能」からも自然に説明がつくことなのである。そこで、改めて there 構文を用いて事態を言語化する状況を考えてみると、それは「聞き手に新情報を提示する、あるいは何かの事態の存在に気付かせる」ということである。ここで重要なことはこの時の話者と聞き手との間にはいわゆる information gap が存在するということである。このことをより明確に理解するために具体的なデータを観察してみよう。

(41) Over the past few decades, there has been a steady increase in the number of cars, resulting in more traffic jams in large cities.

(42) There is a man who wants to see you at the door.

(41) ではここ数十年の車の台数についての記述がなされており、この記述されている事態は話者や聞き手の眼前の出来事ではない。また、(42) は話者にとっては眼前の事態、つまり知覚世界の出来事であるが、このことを情報として提供される聞き手にとってはこの事態は同定されておらず、むしろ聞き手はまずその事態を想起し、その次の段階でそれを知覚世界で具体的な対応物を同定するという過程が必要となる。そこで、(41) と (42) の話者と聞き手の認知プロセスをそれぞれ図示すると図 13(a)、(b) のようになる。

⁹ 久野・高見 (2002 : 60) は (36)、(37) や (39)、(40) の容認可能性の違いを完了形や進行形が単純形に比べて話者の観察者としての機能が明確にでており、そのために容認度が高まると述べている。

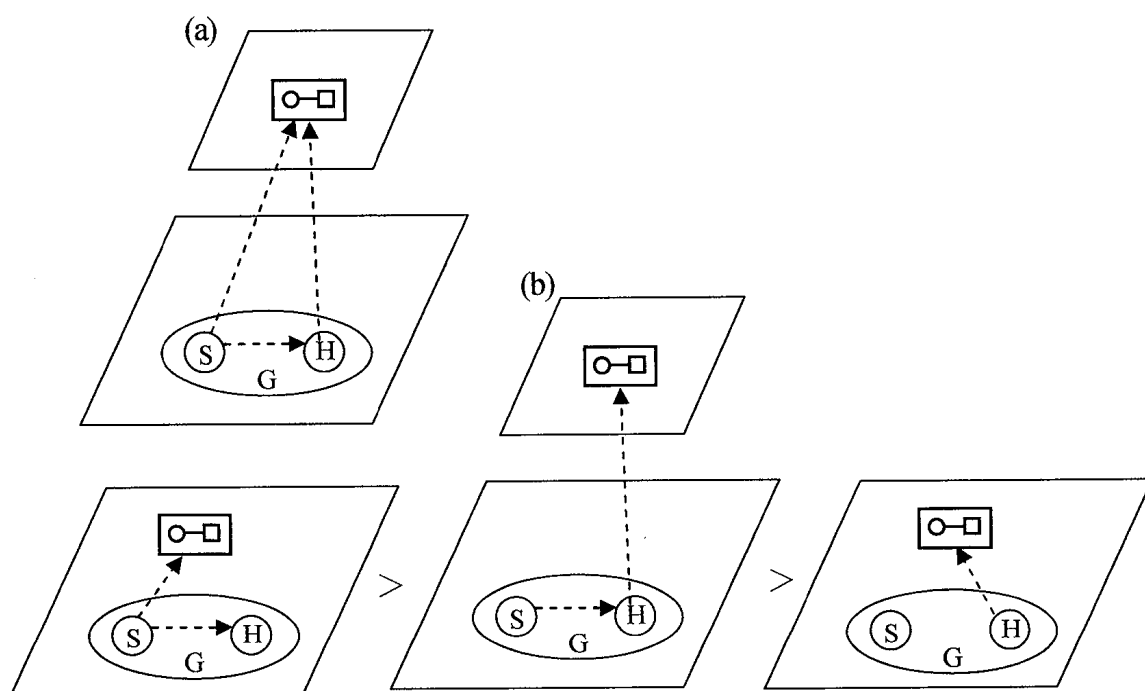


Figure 13

図 13 では下の四角は知覚世界を上の上の四角は認識世界を表わし、S は話者、H は聞き手、そして G はグラウンドをそれぞれ表している。また、S や H から伸びている破線の矢印は記述対象である事態への心的接触を表わしている。そしてこのことが我々に語っていることはグラウンドの構成要素である概念主体（話者・聞き手）にとって記述対象である事態は知覚世界のことではなく、むしろある状況を理解するために想起した概念であるということである。この意味で Bolinger (1977: 92) が there 構文の機能は「ある事柄を意識にのぼらせる (bring something into awareness)」ことであると述べ、また、中右 (1998: 81) や上山 (2003) が「there 構文は認識領域 (概念的知識領域) に属する実体の存在を記述する様式である」と主張していることはまさにその通りであるが、問題はそれがどのような認知プロセスに起因するのかということである。

このことは結論的には there 構文のもつ「提示機能」という「構文の意味」とその認知メカニズムから自然に説明することができると考えられる。つまり、この構文では there によって抽象的な空間ドメインが活性化し、それを参照点としてその中にターゲットである事態が位置付けられ、最終的な段階でグラウ

ンドされる構造になっていることは先にも述べたが、このとき there という space builder によって活性化された抽象的な空間は心的空間 (mental space) であり、従って、そこに位置付けられるターゲットとしての事態も一般化 (generalize) されたものとして記述されているということである。つまり、このことはその事態が 2.2.節で述べた structural plane 上の概念であり、そのために任意の具現形 (arbitrary instance) として理解されるということなのである。

3.3. RT/T 認知モードから tr/lm 認知モードでの捉え直し

3.1. では there 構文が我々の認知能力の一つである参照点能力を反映した参照点構造であり、ターゲットである事態が there によって活性化される認知空間に概念的に依存するためにその事態が累積的捜査で捉えられ、holistic に認識されていることを述べた。また、ターゲットである事態の参与者に動詞の数が一致するのは、この構造のもつ性質から自然に説明できることを主張した。しかし、これで there 構文の特異性のすべてを説明し尽くしたわけではない。それはこの構文の特徴である there が統語上の主語として振舞っているということがまだ説明されていないからである。そこで、この問題を改めて考えると、それを原理的に説明するためにはもう一つの認知操作が必要であることに気づく。それは結論的には RP/T 認知モードから tr/lm 認知モードの転換であり、次のように図示することができる。

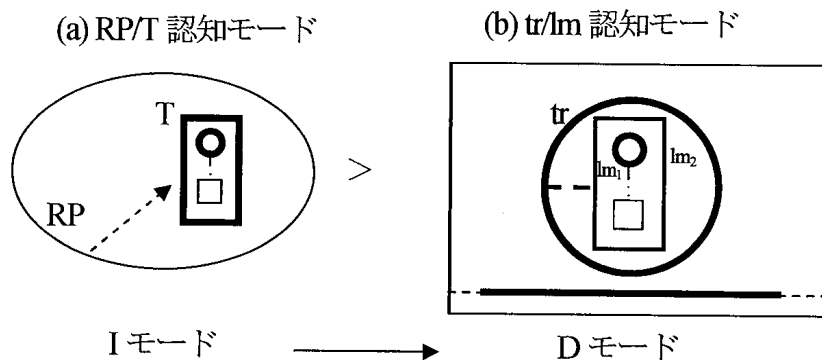


Figure 14

図 14(a-b) は RT/T 認知モードであったものが最終的には tr/lm 認知モードで捉え直されることを示したものである。これは文法化 (grammaticalization) における英語の特徴として tr/lm への捉え直し (主体と客体の分離) が there 構文で捉えられる事態の認知プロセスにも起こることで虚辞 there が言語化され、その結果として there 構文の統語上の主語と意味上の主語の乖離が起こっていると説明することができる¹⁰。そして、この認知モードの転換は中村 (2004: 3-51) の提示する I モードから D モードへの捉え直しとも符合する。

最後に、これまでの議論のまとめとして、第 1 節で指摘した三つの問題がどう説明されるのかを確認してみる。まず一つ目の問題である統語上の主語と意味上の主語の乖離は英語に特徴的な認知モードの捉え直しとしてうまく説明することができる。つまり、意味上の主語と動詞の数の一致は structural plane 上でターゲットとして事態が認識された時点で、その事態の参与者 (participant) と動詞の間に起こるのに対して、there の文法的な主語としての地位はグラウンドされて言語化される段階で、tr/lm 認知モードへの捉え直しという認知プロセスで確立するという二重の認知プロセスがこの there 構文に関わっているからである¹¹。では二つ目の問題である there 構文に現れる動詞の種類および場所句、時間句という setting 要素のかかわりについてはどうだろうか。先に there 構文と共起する典型的な動詞が「存在」「出現」「移動」を表わす動詞であるのは、最終局面として累積的走査により「結果状態」と認識される事態の方が holistic な事態として認識されやすいことの反映であることを述べた。そこ

¹⁰ 虚辞には there のほかに it がある。虚辞の there/it と D モードとの関連および tr/lm の認知モードへの捉え直しについては中村 (2006: 79 ff) に負っている。また、there 構文を文法化の観点からみれば、古い英語では統語上の主語が必要のなかった非人称構文 (e.g. *meseems*) が形式主語の it を必要とするようになった変化と平行的である。次の例は更に文法化が進み音韻変化を伴った現象とみなすこともできる。

(i) *There's some people in the waiting room.* <informal> (Quirk, et. al. 1985: 1405)

¹¹ Langacker (1991: 439) では、次のように述べられている。

A fully articulated finite clause subsumes the layered semantic functions of grounding, quantification, instantiation, and type specification: (G(Q(I(T))))). つまり、数の解釈を含む数量詞化 (Q) はグラウンド化以前になされる認知プロセスであるということである。

でこのことを踏まえて次の(43a-b)を考えてみると、

- (43) a. *There danced a young girl in the ballroom.
 b. There danced in the ballroom a young girl.

(久野・高見 2002 : 68-69)

(43)で重要なことは *dance* のように行為を表す動詞に行為者が隣接している場合には概念主体はその事態をデフォルトとして tr/lm 認知モードで捉えやすいということである。それに対して *there* 構文で指示される事態認識は tr/lm 認知モードではなく総括的認知走査を伴う RT/T 認知モードであるため、(43a)は容認されない。その一方で(43b)が容認可能となるのは場所を表す前置詞句が動詞に隣接する（意味上の主語の左側にある）ことで「踊る」という行為というよりはむしろ累積的走査により「踊り」としてその存在が holistic に認識されやすくなるからであると考えられる。なぜなら *danced in the ballroom* という表現中の *in the ballroom* が *dance* という行為ではなく *there* という認知空間を specific にする要素として解釈されるからである。そして、このことが RP/T 認知モードでの解釈を活性化させることに繋がるのである。

最後に三つ目の問題である「名詞句の定性制約」についてはどうだろうか。

- (44) a. *There is the book on the table.
 b. *There exist the serious problems

(44a-b)のように意味上の主語が定名詞句の場合に *there* 構文が容認されないのは定名詞句が図 15 のような認知構造をもっており、その指示対象がすでにグラウンドされているために、それが actual plane 上の概念として理解されやすいからである。

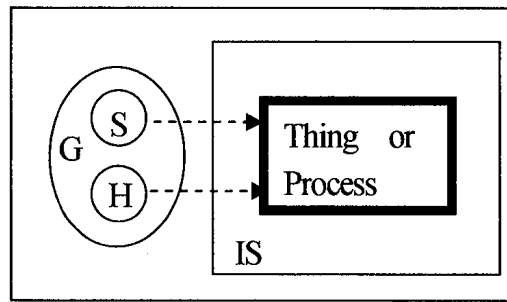


Figure 15

また、次の容認度の違いも同様の説明が可能である。

- (45) a. *Snow is on the roof.
b. The/Some snow is on the roof.
c. There is (some) snow on the roof. (中右 1998 : 57、68)

(45a)が容認されないのは3.1.節ですでに述べたように「はだか存在文」では主語名詞は有形で数量的に限定されたものでなくてはならないからである。つまり、主語である snow が tr として認識し難いからであるとも言えるが、これを概念空間の問題として捉えると「はだか名詞」は actual plane 上の概念ではなく、structural plane または辞書的範疇の type plane 上で概念化される実体である。そのため(45b)のように snow が冠詞の the または数量詞の some でグラウンドされ actual plane 上の概念として解釈されると容認可能となるのである。それに対して(45c)の there 構文ではターゲットの事態は structural plane 上で概念化されるためグラウンドされている必要がなく、その結果容認可能となると言える。

そこで、これまでの議論から there 構文の認知的特徴付けを以下のようにまとめることができる。

- (46) there 構文の認知的特徴付け：
(a) there 構文で指示される事態は RT/T 認知モードという参照点

能力を用いた事態把握であり、there によって抽象的な認知空間が活性化しその中にターゲットとしての事態を位置付ける構文である。

- (b) there はある事態概念を想起するための space builder であり、それによって活性化される認知空間は structural plane に属する。そのためターゲットとしての事態も structural plane 上に概念化される。
- (c) ターゲットとしての事態は抽象的な認知空間である there に概念的に従属するため累積的走査の認知モードで holistic な実体として解釈される。
- (d) structural plane 上にある事態そのものはグラウンドされていないが、tr/lm 認知モードへの捉え直しの際に、THERE が trajector として認識され、そこに位置付けられている概念的に従属した事態を含めた全体がグラウンドされ時間軸上に位置付けられる。

4. まとめ

本稿での基本的な立場は「言語（形式）は人間の認識作用を反映している」ということであり、また、「構文は意味をもつ」ということである。従って概念主体と事態認識の仕方と構文の意味が合致することで、その構文での言語化が可能となるのである。この意味で there 構文は非常に興味深い構文であるといえる。なぜなら、この構文では事態認識が RT/T 認知モードで行われたとしても最終的には tr/lm 認知モードでの捉え直しという二重の認知プロセスを反映している構文であるからであり、そこにこの構文の姿の捉え難さがあるといえる。また、このことに関して更に付け加えれば、すべての言語で「提示機能」が同じ認知プロセスを経るわけではないということであり、たとえば日本語の場合は捉え直しの必要はない。英語の there の機能は(47)の日本語においては

「あれ」が果たしていると考えてもよいように思われる¹²。「松虫が鳴いている」のは structural plane つまり認識の世界であり、「ちんちろちんちろちんちろりん」は actual plane つまり知覚の世界に属することであると考えられる¹³。

(47) あれ、松虫が鳴いている。ちんちろちんちろちんちろりん。

この「提示機能」を表す表現の言語形式の問題は言語類型論的にも非常に興味深く、今後の課題としたい。

※本研究は平成 19 年度札幌大学研究助成 (共同研究：代表 濱田英人) の成果の一部である。

References

- Bolinger, Dwight. 1977. *Meaning and Form*. London: Longman.
- Douglas Biber et. al. 1999. *Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.
- 本田 啓. 2005. 『アフォーダンスの認知意味論』東京大学出版会
- 葛西清蔵. 1978. 「That noise? It's some boys playing outside. の構造」『北海道大学文学部紀要』31 / 1
- 葛西清蔵. 2007. 「知覚動詞構文と there 構文」『文化と言語』67 号. 23-35.
- 葛西清蔵. 2008. 「There 構文と俳句」『文化と言語』68 号.
- 久野暲・高見健一. 2002. 『日英語の自動詞構文』研究社
- Koguma, Takeshi. 2007. *Nominative-Genitive Conversion in Japanese: A Cognitive Grammar Approach*. Doctoral Dissertation, Kanazawa Uni-

¹² 「共同注意」「指し言葉」については本田 (2005) の第 9 章、第 10 章を参照。

¹³ 「知覚」と「認識」および there 構文と関連する以下の文の分析については、葛西 (1978) を参照。

(i) That noise? It's some boys playing outside.

versity.

- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire and Dangerous Things*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald. W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar*, vol.1: *Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald. W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar*, vol.2: *Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald. W. 1993. Reference-Point Constructions. *Cognitive Linguistics* 4. 1-38.
- Langacker, Ronald. W. 1999a. Virtual Reality. *Studies in Linguistic Sciences* 29-2: 77-103.
- Langacker, Ronald. W. 1999b. *Grammar and Conceptualization*. (Cognitive Linguistics Research 14.) Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- 谷口一美. 2005. 『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』ひつじ書房
- 對馬康博. 2004. there 構文再考 — 認知文法の視点から — MS
- 中右 実. 1998. 「空間と存在の構図」『構文と事象構造』日英語比較選書 5. 研究社
- 中島文雄. 1961. 『英文法の体系』研究社.
- 中村芳久. 2004. 『認知文法論II』大修館書店
- 中村芳久. 2006. 「言語における主観性・客観性の認知メカニズム」『言語』vol. 35 no.5 大修館書店
- Quirk *et. al.* 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- 上山泰男. 2003. 「機能的構文論における there 構文の分析」『函館英文学 XLII』函館英語英文学会